

# イヴァン・ヴィシュネグラツキーの《前奏曲とフーガ》作品 15 —— 連続体による旋法性の形成 ——

Ivan Wyschnegradsky's « Prelude and Fugue » opus 15 :  
its continuum structure and modality

---

杉 山 怜  
SUGIYAMA Ryo

Ivan Wyschnegradsky (1893-1979) composed « Prélude et fugue » opus 15 for quarter-tone piano in 1927. In this piece, he used the continuum technique and the chord called "inversion of continuum". And according to his list of works, the theme of this piece is based on « The Red Gospel » opus 8 for bass-baritone and piano. This paper examines the relations between opus 15 and opus 8, and the continuum structure of opus 15.

## 1 はじめに

サンクトペテルブルク出身の作曲家イヴァン・ヴィシュネグラツキー Ivan Wyschnegradsky (1893-1979) は、1920 年よりパリに渡って活動した。1920 年代のヴィシュネグラツキーは、四分音ピアノの製作に尽力するとともに、四分音を用いた作品を多く作曲している。四分音ピアノを想定して作曲された《前奏曲とフーガ Prélude et fugue》作品 15 は、1927 年に作曲され、1928 年に弦楽四重奏の編成に編曲されて初演された<sup>1</sup>。本作品は、ヴィシュネグラツキー自身が執筆した雑誌記事「音楽のなかでの四分音の使用に関するいくつかの考察 Quelques considérations sur l'emploi des quarts de ton dans la musique」(1927a)<sup>2</sup>のなかで、「連続体 continuum」や「連続体の転回 renversement du continuum」と自ら名づけた和音が使用されている作品として紹介されている。

また、本作品はヴィシュネグラツキーのロシア時代の歌曲《赤い福音書 Красное Евангелие / L'évangile rouge》作品 8 (1918-1920、改訂 1937) のなかの旋律を主題として用いている点でも注目される。ヴィシュネグラツキーは《前奏曲とフーガ》という名称をつけて多くの作品を作曲したが、1972 年にルヴュ・ミュージカル誌に掲載されたヴィシュネグラツキーの作品リスト<sup>3</sup>では、

---

<sup>1</sup> 現在、弦楽四重奏版の楽譜は失われており、四分音ピアノを想定した楽譜が現存している。

<sup>2</sup> Ivan Wyschnegradsky. 1927a. "Quelques considérations sur l'emploi des quarts de ton dans la musique." *Le Monde Musical* No.6, pp.227-230.

<sup>3</sup> Ivan Wyschnegradsky. 1972. "Ultrachromatisme et les espaces non octavians." *La Revue musicale* 290/291, p.134.

本作品は「《赤い福音書》の歌曲の主題に基づく前奏曲とフーガ *Prélude et Fugue sur un chant de l'Évangile rouge*」と記載されている。本作品の《赤い福音書》との関連については先行研究において指摘されておらず、また本作品のなかで用いられている連続体技法については考察されていない。本稿では、本作品の《赤い福音書》との関連性について検討するとともに、作品のなかでの連続体の形成に注目することで、本作品の構造と連続体の関係性について検討していく。

## 2 《前奏曲とフーガ》作品 15 にみられる「連続体の転回」の技法

ヴィシュネグラツキーは《前奏曲とフーガ》作品 15 の連続体技法について、雑誌記事「音楽のなかでの四分音の使用に関するいくつかの考察」のなかで、譜例 1 のように作品を引用しながら紹介している。

譜例 1 《前奏曲とフーガ》作品 15 の「連続体」と「連続体の転回」

譜例 1 において、ヴィシュネグラツキーは X 印の和音を「連続体」と呼び、O 印の和音を「連続体の転回」と位置づけている<sup>4</sup>。ここでは四分音の密集した和音が「連続体」の和音であり、これを音程的に転回させた和音が「連続体の転回」として示されている。譜例 1 にみられるように、「連続体」から「連続体の転回」へと至るように四分音による和声が進行している。はじめに、この和声進行で形成される和音の音程に着目して、和音進行の特徴を整理していく。

譜例 1 で形成されているそれぞれの和音について、大譜表の高音部譜表と低音部譜表に分けて和音の音程を観察すると、高音部譜表では X の和音である連続体 (1/4 音) に続いて、1/2 音 (半音)、

<sup>4</sup> 譜例 1 は、雑誌記事 Wischnegradsky (1927a: 229) に掲載された譜例を筆者が写して再度作成したものである。Wischnegradsky (1927a: 229) に掲載された譜例には O 印が抜け落ちているが、これと同様の内容をヴィシュネグラツキーが英語で執筆した Wischnegradsky (1927b: 24-25) では、譜例 1 のフォルティッシモの和音が連続体の転回の和音であると示されているため、O 印を補って掲載している。

1/2 音、8/4 音（減 4 度）、13/4 音、12/4 音（増 4 度）、16/4 音（短 6 度）、13/4 音、同音（ユニゾン）、連続体（1/4 音）、1/2 音、7/4 音、13/4 音、12/4 音、12/4 音、連続体の転回（23/4 音）、22/4 音（減 8 度）、21/4 音（中間 7 度）、6/4 音（短 3 度）、20/4 音、19/4 音、18/4 音（長 6 度）、連続体（1/4 音）、1/2 音、1/2 音、3/4 音、7/4 音の音程で和音が形成されている<sup>5</sup>。低音部譜表の和音も同様に、高音部譜表の音程と同じ音程間隔で和音が形成されている。このように、高音部譜表と低音部譜表で同じ音程間隔を形成しながら連続体から連続体の転回へと和音の進行を生み出していることが、この四分音による和声進行の特徴としてあげられる。

### 3 《前奏曲とフーガ》作品 15 と《赤い福音書》作品 8 の関連性

《前奏曲とフーガ》作品 15 は、ヴィシュネグラツキーが記しているように《赤い福音書》作品 8 の主題に基づいて作曲されている。ロシア時代のヴィシュネグラツキーの歌曲《赤い福音書》は、詩人ヴァシリー・クニャーゼフ Василий Князев (1887-1937) による詩『赤い福音書 Красное Евангелие』(1918) のなかの 13 の詩節を用いて作曲された作品である。ヴィシュネグラツキーの最初の微分音作品が生み出されることとなった 1918 年に作曲が始められ、1919 年に第 12 曲を除く 12 曲が完成し、1920 年に第 12 曲が作曲されて完成した。ここでは、ヴィシュネグラツキーの歌曲《赤い福音書》の四分音表記について確認し、《前奏曲とフーガ》作品 15 の主題との関連性について検討していく。

《赤い福音書》はバス・バリトンとピアノのために構想され、バス・バリトンの声部には四分音が記されている。ヴィシュネグラツキーは本作品の楽譜に添えられた楽譜のなかで次のように説明している。

Партия певца в этом произведении допускает местами четвертитоновые интонации, более выразительные и соответствующие тексту, чем обычные полутоновые. Эти интонации нотированы путем специальных знаков (порудиезы и порубемоли) поставленных над нотой и заключенных в скобки. Таким путем обе версии : полутоновая и четвертитоновая записаны на одной и той-же строке и певец может по своему желанию выбирать ту или иную версию в любой из 13-ти песен.

この作品の声楽の声部は、ところどころ四分音のイントネーションが可能であり、通常の半音のもの以上に表現力にとんだ、しかるべきテキストを可能にする。このイントネーションの記譜は、音符の上で括弧でくくって示された特殊な記号（ポリ・シャープとポリ・フラット）による。このような方法では、同じ行に書き込まれている半音と四分音の 2 つの方法があり、歌い手は自身の希望にしたがって 13 の歌曲のどの作品でも任意の方法を選ぶことができる。

<sup>5</sup> 連続体の転回の和音の前に奏される内声部の経過音による進行は省略している。

このように、バス・バリトンの声部に用いられている四分音については、歌手が任意で四分音の使用を選択することができることが示されている。ヴィシュネグラツキーは、以下のような譜例を示しながらこの表記法について解説している。



譜例2 バス・バリトン声部の四分音の表記法

譜例2のように、四分音を用いない半音の方法と四分音を用いる方法が同時に示される記譜法が採用されている<sup>6</sup>。その一方、ヴィシュネグラツキーは半音の場合よりも四分音を用いた場合により豊かな表現を得ることができることを示唆しており、1937年にバス・バリトンと2台のピアノの編成に改訂された際には、四分音の表記は通常の臨時記号と同様に記譜されることとなった<sup>7</sup>。

このように《赤い福音書》は当初、半音での演奏と四分音の演奏が選択することができる作品として構想されたが、ヴィシュネグラツキーは《前奏曲とフーガ》作品15の主題として《赤い福音書》の一節を採用している。《前奏曲とフーガ》作品15のフーガの冒頭は、譜例3のように演奏される<sup>8</sup>。



譜例3 《前奏曲とフーガ》作品15 〈フーガ〉冒頭（第1～8小節）

このフーガの冒頭の旋律に類似するものとして、《赤い福音書》の第 6 曲の旋律があげられる。《赤い福音書》の第 6 曲には、バス・バリトンの声部に次のような旋律が用いられている<sup>9</sup>。

#### 譜例 4 《赤い福音書》第 6 曲冒頭バス・バリトン声部の旋律（第 1～5 小節）

譜例 4 の旋律は、譜例 3 の冒頭にみられる《前奏曲とフーガ》作品 15 のフーガの主題の音程構造と類似している。また、譜例 1 の和声進行で最も高い声部に用いられている進行の音型についても、譜例 4 の旋律の構造と類似している。したがって、本作品は《赤い福音書》の第 6 曲と関連性を持つことが指摘される。

#### 4 《前奏曲とフーガ》作品 15 にみられる連続体の形成

《赤い福音書》の一節を主題とする《前奏曲とフーガ》作品 15 は、ヴィシュネグラツキーによって譜例 1 のように「連続体の転回」の技法に焦点が当てられて紹介されているが、この譜例 1 の箇所は作品の最後の部分に位置している。作品全体では譜例 1 のような和声的な進行はあまりみられず、フーガの部分を中心として主に対位法的な進行が形成されている。図 1 にみられるように、本作品は四分音を用いた自由な前奏曲の後に、二声部や三声部、四声部によるフーガの対位法的な進行によって四分音によるさまざまな音程が形成され、作品の最後の第 76 小節から第 86 小節にかけて譜例 1 の和声的な進行が現れるという作品構造をとっている。

<sup>6</sup> 譜例 2 はヴィシュネグラツキーが示した譜例を筆者が写して作成したものである。

<sup>7</sup> 改訂後は 2 台のピアノのうち一方を四分音ずらして調律する方法を採用することによって、ピアノの部分にも四分音が導入されることとなった。改訂版にはバス・バリトンの声部の半音による演奏の選択は存在せず、四分音によってのみ演奏される作品となった。

<sup>8</sup> 譜例 3 は筆者が作成したものである。

<sup>9</sup> 《前奏曲とフーガ》作品 15 は、《赤い福音書》が改訂される前の 1927 年に作曲されているため、ここでの譜例は改訂前の版を用いている。譜例 4 はこの改訂前の楽譜をもとに筆者が作成した。

## 前奏曲

第 1 小節 – 第 29 小節	前奏曲
------------------	-----

## フーガ

第 1 小節 – 第 4 小節	主題の提示
第 5 小節 – 第 10 小節	二声部のフーガ
第 11 小節 – 第 14 小節	三声部のフーガ
第 15 小節 – 第 31 小節	四声部のフーガ
第 31 小節 – 第 35 小節	二声部のフーガ
第 36 小節 – 第 40 小節	三声部のフーガ
第 41 小節 – 第 62 小節	四声部のフーガ
第 63 小節 – 第 64 小節	一声部の楽句
第 66 小節 – 第 67 小節	四声部の楽句
第 68 小節	二声部の楽句
第 69 小節 – 第 75 小節	四声部の楽句
第 76 小節 – 第 86 小節	四声部による和声的な楽句

図 1 《前奏曲とフーガ》作品 15 の作品構造

ここでは、譜例 1 の箇所以外のフーガの部分に焦点をあてて、連続体の形成の観点から作品構造について検討する<sup>10</sup>。

<sup>10</sup> 《前奏曲とフーガ》作品 15 の前奏曲では、連続体は形成されない。また譜例 5、譜例 6 は筆者による作成である。

The image displays a musical score for the Fugue section of the Prelude and Fugue, Op. 15, measures 28-31. The score is written for piano and consists of four systems of music. Each system shows the right and left hands. The key signature is G major (one sharp) and the time signature is 3/4. The score includes various musical notations such as triplets (marked with '3'), quintuplets (marked with '5'), and dynamic markings like 'pp subito' and 'mp'. The first system (measures 28-29) features a triplet in the right hand and a triplet in the left hand. The second system (measures 29-30) features a quintuplet in the right hand and a triplet in the left hand. The third system (measures 30-31) features a quintuplet in the right hand and a triplet in the left hand. The fourth system (measures 31) features a quintuplet in the right hand and a triplet in the left hand.

譜例 5 《前奏曲とフーガ》作品 15 〈フーガ〉第 28～31 小節

フーガのそれぞれの声部の進行が最初に連続体に収束する箇所は、フーガの第 29 小節から第 31 小節第 1 拍目までにみられる。この箇所では主題が低音で奏されるため、完全な四声部の連続体は形成されないが、対旋律の三声部による連続体が形成されている。

第 29 小節から第 31 小節第 1 拍目では、ハ音の周辺で三声部の連続体が形成されている。その後、この連続体の形成を経て、四声部のフーガから二声部のフーガに移行していく。連続体を構成するそれぞれの声部が連続体に収束した地点で、楽節構造が変化している。

次に各声部が連続体に収束する箇所は第 60 小節から第 62 小節にかけてであり、ここでは四声部による連続体が形成される。第 60 小節のはじめで形成される連続体は、四分の三嬰二音を最低音に持つ連続体であり、第 61 小節で形成される連続体は、ホ音を最低音とする連続体である。

譜例 6 《前奏曲とフーガ》作品 15 〈フーガ〉第 58～62 小節

この四声部の連続体の箇所は、第 41 小節から続く四声部のフーガの最後の部分であり、各声部が連続体に収束することで、楽節構造が変化していく。したがって、本作品のフーガでの連続体の形成は、楽節構造が変化する地点で行われていることが確認される。このように、楽節構造が変化する箇所に連続体の形成がみられ、連続体の形成を区切りとした作品構造が見出される。



## 5 おわりに

以上のように、《前奏曲とフーガ》作品 15 は《赤い福音書》第 6 曲の旋律と音程構造で関連性を持ち、また作品の最後の箇所です「連続体の転回」の技法を用いるとともに、楽節構造の区切りに連続体が形成される作品構造をとっていることが確認された。連続体に収束するまでのそれぞれの声部進行は多種多様であるが、フーガの第 61 小節でホ音の周辺に形成される連続体を中心として、第 29 小節から第 31 小節第 1 拍目までハ音の周辺に形成される連続体がホ音の周辺に形成される連続体を準備する連続体として機能している。作品の大きな構造として、連続体による旋法性の要素が見出される。

---

### 主要参考文献

- Wischnegradsky, Ivan. 1927a. "Quelques considérations sur l'emploi des quarts de ton dans la musique." *Le Monde Musical* No.6, pp. 227-230.
- \_\_\_\_\_. 1927b. "Quartertonal music, its possibilities and organic sources." *Pro Musica Quaterly* 6, pp. 19-31.
- Wyschnegradsky, Ivan. 1972. "Ultrachromatisme et les espaces non octavians." *La Revue musicale* 290/291, p. 71-130.
- \_\_\_\_\_. *L'évangile rouge opus 8*. Composed in 1918-1920. Autograph manuscript in Ivan Wyschnegradsky Collection. Basel: Paul Sacher Stiftung.
- \_\_\_\_\_. *Prélude et fugue opus 15*. Composed in 1927. Autograph manuscript in Ivan Wyschnegradsky Collection. Basel: Paul Sacher Stiftung.